

ミャンマーには、穏やかな空気が流れていました

栗又衛 2021年9月記

ヤンゴンとバガン遺跡へ

2016年12月、快適な気候のなか1週間ほどミャンマーを旅しました。最大都市ヤンゴン(かつてのラングーン)と東南アジア仏教三大遺跡の一つ、バガン遺跡の2カ所だけでしたが。2016年1月の民主化後、「東南アジア最後のフロンティア」と言われ経済的にも世界の注目を集めていたミャンマーでしたので、新自由主義的改革／開発に飲み込まれる前に、素朴なミャンマーに行ってみようという軽い気持ちで出かけました。

その時、路上の帽子売りから200円で買った野球帽をかぶって散歩しながら、あのとき一緒に写真を撮った高校生は無事だろうかとふと心配になります。同じように路上で買ったスーチーさんのカレンダーを時々眺めながら、私たちが出来ることを考えています。

多様な人々が暮らす

ミャンマーの人口は約5300万人で、国土の中央を流れるエーヤワディー川流域に多数派のビルマ人などが多く暮らし、周辺の山岳地域に135もの少数民族が暮らす多様な民族の国です。イギリスの植民地時代にやって来たインド人や中国人、さらにはイスラム系の人々(ロヒンギャ問題があります)も共に暮らしています。軍による少数民族の弾圧も大きな国内問題です。

生き生きとした人々の暮らし

ヤンゴンの街を歩くと軍政時代に強制された「ロンジー」という巻きスカートをはいている男性も目立ちますが、歩道に置かれた発電機と走り回る日本の中古自動車も目に付きます。ものが溢れ活気のある市場もたくさんありますが、路上で鶏や犬などの動物から本までいろんな物が売られていました。私が感心したのは本・雑誌・新聞がどこでも売られていたことです。調べてみるとミャンマーの識字率は92%と高く、教育の普及が人々を民主化へと向かわせる原動力になっているのだと感じました。この人々の平和でよりよい暮らしを求める気持ちを無視することなどできるわけがありません。ミャンマーの若者達にもスマホが普及し、歩きスマホをよく見かけました。今、このスマホも民主化運動の武器になっていることでしょう。

20円でヤンゴンを一周!

イギリス植民地時代に整備された鉄道網が健在で、ヤンゴンを一周する山手線のような環状線に乗ってみました。老朽化のため、ゆっくりとしか走れませんが、運賃は一律20円なので、物売りに出かける人たちが乗り降りしていました。お面、お菓子、野菜、鶏などいろんなものを見かけました。この線路沿いには青空市場もたくさんあって、賑わっていました。私が嬉しかったのは、日本の中古の鉄道車両がいろいろ走り、ミャンマーの人たちになじんでいることです。

ミャンマーの人たちは親日的だ言われています。フェリー乗り場に行って切符を買おうとしたときに、係の人から「日本人か」と聞かれ「そうだ」と答えると「切符は買わなくてもいいよ」と言われました。その理由をあとで調べたら、日本から援助されたものなので、日本人は無料でよいということだったのです。軍政時代の援助ですが、今後は軍政を後押ししないような援助をしなければと思います。

祈りの国

ヤンゴンの街中でも黄色や橙色の衣をまとった僧侶をよく見かけます。黄金色に輝く仏教寺院も数多く見られ、仏教が生活に深く根づいていることがわかります。

中部のバガン遺跡は、11~13世紀に栄えたバガン朝時代に、3000を超すパゴダ(仏塔)、そして寺院が建立されました。現在もそびえ立つ様は、まさに圧巻です。世界遺産のパゴダに登り、沈む夕陽を眺めると心を洗われる思いがします。

祈りの国の人々に自由で穏やかな日々が早く戻ることを、祈らずにはられません。